

月は私たちに身近な存在だが、望遠鏡で月の表情を眺めると、変化に富んだ地形の美しさに驚嘆する。花鳥風月という言葉があるように、月は自然美を代表する風物として、人々のそばにいた。そして、さまざまな文学作品の主人公にもなっている。詩や歌に詠まれた月のある情景を選び、とびっきり上等の月面写真を添えてみた。いずれも月の名所ばかりである。夏の夜のひととき、文学に親しみながら、望遠鏡を向けて月と遊んでみませんか。(岐阜大学教育学部・川上紳一助教授)



川上紳一  
岐阜大助教授

# 望遠鏡

望遠鏡で楽しむ月文学

〇 1 〇

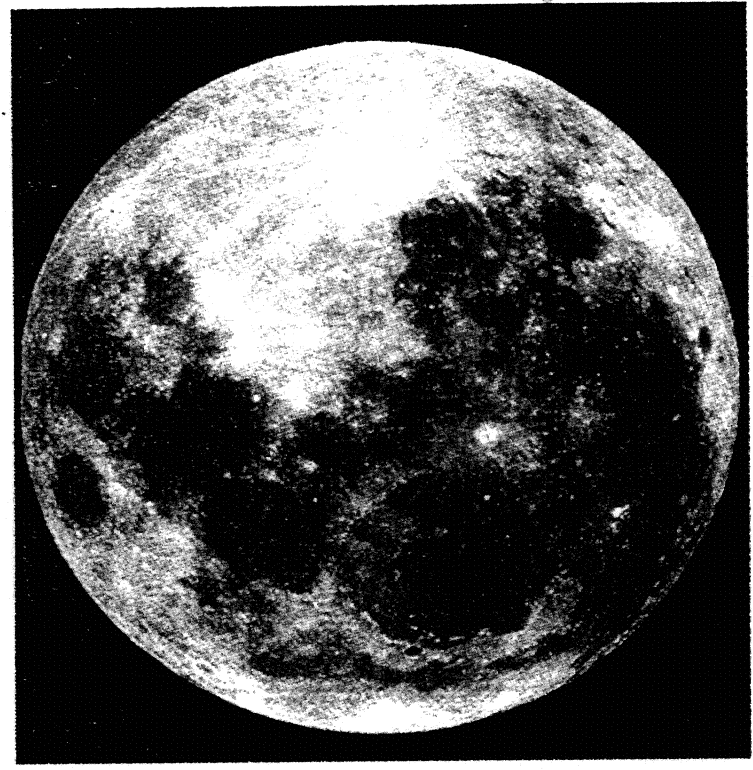
風習が残っている。

「月ごとに 見る月なれど このに隠れてその薬を飲んでしまった。月の こよいの月に 似る月ぞな 嫦娥は天に舞い上がり、月の神としき」(村上天皇「続古今和歌集」) て祭られるようになったという。これは平安時代・天暦年間の旧暦 月の南にある直径八十五キロのクレーター、チコ。満月の日には、それを詠んだものだ。日本では十五夜に 月から広がる光条がひと際美しく見ススキや団子を供えて秋の収穫を祝 える。天体衝突で飛び散った岩石がう。中国でも中秋の名月を観賞する 月面を広くおったものだ。

## 満月 光条放つクレーター

牛乳に落ちたしずくがはねてできるミルククラウンのようなクレーター中央の大きな突起が、天体衝突の衝撃を伝えている。

(文・川上紳一、  
カメラ・白尾元理  
写真家)



月面に光条を放つクレーター・チコ(中央上)。天体衝突の衝撃を伝える